〔碩鼠漫筆〕馬酔木の説

万葉集巻二二十六丁左に磯之於爾生流馬酔木乎云々、巻八十五丁左に山毛世爾咲有馬酔木乃云々、巻十十右に瀧上乃馬酔之花曾云々、又十四丁右奥山之馬酔花之云々、又十七丁右春山之馬酔花之云々、巻十三二右に本邊者馬酔木花開云々と見えたるを、先達の考へにて安之比と點を改めたるは、げに然る事也、さるは巻七十右に安志妣成榮之君之云々、巻二十六二右に安之婢乃波奈毛左伎爾家流可母、又同丁左佐伎爾保布安之婢乃波奈乎云々、又同丁左氐流麻涅爾左家流安之婢乃云々とあるに據てなりけり、偖冠辭考云、花の照にほふ色も、春深く野山にさくなども、茵に似たるさまによめるを思へば、木瓜にぞ有ける、いかにぞなれば、其木瓜は字音にて、こゝの語ならず、東人の玄どみと云て馬の毒也とする物ぞ是なる、彼伊波都々自を羊躑躅とするに對へて、安志妣を馬酔木と書るにても玄るべし、偖馬の是を喰へば酔てあしなへと成なるべし、其あしびとも、玄どみともいふ語を考ふるに、病に志良太美あり、貝に志多太美、草に毒だみと云、太美は病の事なり、扨其太美と度美と音の通ふに依て、志度美は安志太美の安を略き、太と度は同音なり安志妣は安志太美の太を略けるなり、妣の濁と美の清とは常に通へり後世の歌に、取つなげ玉田横野の放れ駒つゝじまじりにあしみ花さく、○中略散木集註に、今案ずれば、あせみつゝじは共に馬毒なり、万葉集には馬酔木とかきてあせみともよみ、つゝじともよめり、可レ付二何説乎、又ともに毒なればつゝじのをかにあせみさかばかたがたあしければ、かくの如くよめるか以上と見ゆれど、馬酔木には總てツゝジの點のみ見えて、アセミの點はふつになき事、既に上件に載たるが如し、但羊躑躅の漢名を思へば、つゝじも實に馬の毒なるべし、偖又アセボをアセミとしたるも、やゝ古き事とおもはる、新撰六帖第六衣笠内大臣の歌に、吉野川瀧つ岩根の白妙にあせみの花も咲にけらしな、とあるを見るべし、されば彼本草啓蒙も亦此誤りを受て、巻三十二灌木類に侵木アシミ、萬葉集アセボ、古今通名馬酔木共同アセミ、古歌仙台ア